

第5学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「方言と共通語」 教材名「方言と共通語」

2 単元の目標

共通語と方言との違いを理解し、言葉が地域や世代によって異なることに気付くことができる。相手の立場や意図を確かめながら話し合い、場面に合う伝え方について考えを広げることができる。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①共通語と方言との違いを理解し、言葉が地域や世代によって異なることに気付いている。（〔知識及び技能〕(3)ウ）	①「話すこと・聞くこと」において、相手の立場や意図を確かめながら話し合い、場面に合う伝え方について考えを広げている。（A(1)オ）	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

共通語と方言の違いを知り、相手や場面に合わせて伝え方を考える。方言を誤りとして直す授業にしない。学習指導要領のA(1)オを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(3)ウを、言語活動の中で確かめる。年間指導計画の重点項目は知識・技能である。本案では、身に付けた知識を文や話の中で使う言語活動に対応する思考・判断・表現の事項も関連付けている。

（2）児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

（3）指導について

教師が公的な方言辞典等で意味を確かめた語を提示する。同じ語でも地域や世代で用法が違う場合は注記し、本人の家庭や出身地の発表を必須にしない。おおむね満足できる状況は、相手の立場や意図を確かめながら話し合い、場面に合う伝え方について考えを広げているという姿で捉える。語句や本文を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全2時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○方言と共通語の例を確かめる。同じ言葉の使う地域と意味を調べる。	学習状況を見て支援する。
第2次	2 （本時）	○相手に応じる説明を考える。言葉を尊重する伝え方を話し合う。	思①（発言・学習記録）



6 本時の指導 (2/2)

(1) 本時の目標

相手の立場や意図を確かめながら話し合い、場面に合う伝え方について考えを広げることができる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・ 予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「初めてその言葉を聞く人に伝えるなら、どんな説明を加えますか」 【めあて】共通語と方言の違いを知り、相手や場面に合わせて伝え方を考える。 〈予想される児童の反応〉 ・ いつも使う言葉でも、ほかの地域では意味が違うことがある。	本時に考える対象を確認し、既に分かったことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「初めてその言葉を聞く人に伝えるなら、どんな説明を加えますか」 相手に応じる説明を考える。言葉を尊重する伝え方を話し合う。 説明したい方言、確かめた地域と意味、初めて聞く相手への言い換えや補足。 自分が選んだ言葉とその理由を相手に説明する。聞き手は、意図した意味が伝わった箇所と確かめたい箇所を返す。 〈予想される児童の反応〉 ・ いつも使う言葉でも、ほかの地域では意味が違うことがある。 ・ 方言のよさを残したまま意味を説明したい。 ・ だれに話すかで使う言葉を考えたい。	教師が公的な方言辞典等で意味を確かめた語を提示する。同じ語でも地域や世代で用法が違う場合は注記し、本人の家庭や出身地の発表を必須にしない。 想定するつまずき：共通語だけが正しく方言は直すべき言葉だと考える、家族の話し方をからかう。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 相手の立場や意図を確かめながら話し合い、場面に合う伝え方について考えを広げている。(発言と学習記録)
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって分かったことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・ 友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・ だれに話すかで使う言葉を考えたい。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った具体的な言葉を入れる。書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って自分の表し方を確かめる。 ◎態① (学習前後の記録と、見直した理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に題名と本時のめあて。その左に問い「初めてその言葉を聞く人に伝えるなら、どんな説明を加えますか」。中央は根拠となる言葉・本文の箇所と、そこから考えたことを上下に対応させる。根拠の本文は先生が教科書から書き入れる。中央から左に児童の考えを並べ、同じところを囲み、違いの理由を線で結ぶ。左端に、本時で確かめた具体的な言葉を含むまとめと、考えを見直した理由を書く欄を置く。縦書きで右から左へ学習の順をたどれるようにする。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

